中国庭園における水景技法

Technique of the Water scenery in Chinese garden

河原 武敏

Takatoshi KAWAHARA

Keywords : 1. 技法 2. 水景 3. 中国庭園

1. Technique 2. Water scenery 3. Chinese garden

はじめに

中国の庭園で水景は築山・建築・植栽とともに四大施設に数えられている。それは自然界に存在するその千差万別な地貌の中から、その美しい景観を庭園に採りこんだもので、その技法を「理水」と称している。本文ではこれを「水景技法」として、諸文献と実例の中からその基本的な考え方、計画、施設、施工を明らかにする。

I. 水景に関する基本的な考え方

1. 水は山に従って転ず〔山因水活 水随山転〕

中国では古来、「水」の美しさを好み、庭園の水景技法として用いられている。その理由を宋の郭熙は「山は水を以って血液となし、草木を以って毛髪となし、煙霧を以って風采となす。故に山は水を得て生き、草木を以って華やかになり、煙霧を以って秀眉。水は山を以って面とし、亭榭を以って眉目となし、釣を楽しむ。故に水は山を得て媚、亭榭を得て明快、釣りを楽しむ。此れ山水を配置する所以なり《林泉高致》。」とし、更に、明の王世貞も作庭するにあたって「山には水がめぐり、山は水を得て生きる。故に造園するには先ず池を掘り、その土で山を築く。池はなるべく広く、山なるべく高くし《弇山園記》。」とあって、山水

の結合で様々な境地を作り出すことができるからである。

2. 知者は水を楽しむ〔知者楽水 仁者乐山〕

水景鑑賞の根底には孔子の自然山水に対する想いが影響している。「智者は水を楽しむ、仁者は山を楽しむ。智者は動き、仁者は静か。智者は楽しみ、仁者は寿ぐ《論語・雍也》。」とあるのがそれで。此れに就いて漢の韓嬰は「水は理に基づいて行われ、小さな隙間も残さない。——万事平らかで物を正しく見せる。此れが知者の水を楽しむ所以である《韓詩外伝》。」とし、また宋の朱熹も水が「知者は事を為すのと、流れが停滞しないのとがにているため、水が楽しまれるのである《注解》。」とその解説している。

3. 庭園は水なくして成立し難い〔造園必須有水 無水難以成園〕

庭園造景に「水」の持つ清浄感、開放感、幽深感、水面の変幻などが要求されている。清の尤侗は水景の審美的効果を「清らかに澄んだ「潔」、水面投影の「虚」、音の響く「動」、水紋の輝く彩りの「文」の4文字に総括し、明の鄒迪は「庭園の優れているのは山と水の二つが備わって居るからで、水無くして山が有り、山無くして水が有るのは優れていると言えない。《愚公谷乘》」

とか、王世貞も「およそ山を置くに水の無いのを憎む、《安氏西林記》」とある。

4. 人工も自然らしく〔雖由人作、宛自天開〕

庭園は「人が作ったにせよ、自然らしく見せるため、なるべく人工の痕跡を残さないよう工夫することが大切である」と、明の計成は《園冶・園説》の冒頭で力説している。

自然の法則に倣い、庭園施設の自然性を高めるには、中途半端な模倣や濃縮は避けるべきで庭園施設共通の原理としている。

II. 水景の計画

水景には他の施設に無い独自の魅力がある。それは水態の静かで爽やかな開放感、動く氣勢の変化、水面の投影や音響に意外な境地にある。

これらの計画について、清の潘耒は「水を留めるに堤を以ってし、流すに渠、平水面に潭、曲折する所に澗、激しく奔るには泉、曲がって停滞するところには塘や沼にする《從棹園記》。」と自然に倣うことを強調し、計成は「高い所は更に高く、低い所は更に深くすべきである《園冶》。」と土量均衡の原則を示唆している。また曹林娣は計画に「分・隔・破・繞・掩・映・近・静・声・活《中国園林芸術論》。」という10の変化を示しているが、筆者はこれを水面の分集・隠現・静動の3原則に整理した。

1. 池面の大は分け、小は集める〔大分小聚〕

天然の大きな水面は、その広すぎる単調さを避けるため分割して、大小、長短、深淺、曲折などの異なる景区を造り、その景観化を図かっている。その長堤には様々な

様式の橋や亭廊を設けて水面を分割し、空間に奥行きを与えている。例えば堤によって杭州の西湖は3分割、揚州の瘦西湖は橋で2分割してその水景美を高めている。

2. 池面の岸は屈折させる〔貴在曲折〕

単調な池形は平凡な水景となり奥行感を損なう。このことを陳從周は「水は深いだけでなく、曲折の妙が大切である《説園》」1)と変化をつけるよう強調し、その趣を生むため章菜烈は《中国園林芸術通論》に「蔵源」「引流」「集散」の3つを紹介している。

①蔵源：水源を滝・洞窟・石の隙間などに隠す方法。水源を探る興味を引き起こす。例えば蘇州にある環秀山荘の水源は洞叡中から、獅子林では小赤壁水門、楊州の小盤谷もまた水源を「雪在山泉」に隠している。この着想は既に宋代の郭熙が画の中に「遠くから流れが欲しいなら、流れが断続するように見せる《林泉高致》。」からと思われる。

②引流：水を導いて池面に展開させるとき優美な曲線を描いて引き込む方法。例えば南京の瞻園は滝から曲がりくねった溪流と谷澗を経て池に通じ、奥行き感を与えている。

③集散：水面を集散させ、その出入りによって景観を美しく展開させる方法。これによって遠近感を増し単調さを避けることが出来る。例えば無錫の寄暢園の池は単調な方形だが橋廊の出入りによって救われている。

3. 水面の静態と動態を生かす〔動水と静水〕

(1) 静態水〔静水〕

水体の色は地味だが、時には豊富な色彩を生む。中でも静けさが尊重される池にあっては、周囲の景色が水面に映える投影美と水藻や魚影、雨滴や微風の水紋、水面に映る月や雲の影、日の輝きなどの反映美などがことのほか喜ばれている。

①岸周辺の投影美：建築は水面と組み合わせることによって格別な貼水美を発揮する。計成は「水の利用については、園の基盤を水面近くに選定すべきである《園冶》。」と水面と建築の結びつきの効果を示唆している。これによって生まれる反映美は既に1500年前、北魏の楊衒之によって「青々とした林が水面に垂れ、その緑なす水はまるで水紋のよう《洛陽伽藍記》。」と示され、また北周81)の庾信は「池の水影は景勝の地にも勝る《春譜》。」としており、明末清初の計成もまた「池の鏡に映る白絹の布(滝)、園外にめぐる山並みは緑の屏のよう《園冶》。」と周囲の投影美を讃えている。清の乾隆帝が承德の避暑山荘で詠んだ詩「四面清らかで鏡のように平ら、二層の楼閣が水面に聳えて画のよう。湖に影を宿すに良い所《水閣放船至影湖楼》」とあるのは建築色彩の投影を詠ったものである。

②不時の投影美：不時の気象変化によって生まれる水面の投影美に天光雲影、日昇日落、降雨落雪・激月招雲などがある。この種の美しさを記したものは数多く、中でも鎮江の「影園」を描写した《揚州画舫録》には「園の柳影、水影山影によってこの名がある」と記され園名の由来を述べている。蘇州同里の「退思園」もまた建物が水面に貼りついた様に見えるので貼水園・依水園の別称がある。

(2) 動態水〔動水〕

激流・瀑布・泉水など水の動きと水音が尊重されている。中でも水の反響音を楽しむ工夫が数多く、有名なものに無錫の寄暢園「八音澗」の澗流がある。澗の中で発する水音が澗道に反響し「八音齊奏」と言われている。そのほか北京北海公園の濠濮澗、杭州の虎咆泉「水樂」。また滝には蘇州の獅子林の雨水を建物の軒から築山上の水槽に集めて落水させ、滝音を觀賞する「飛瀑亭」、環秀山荘の降雨を屋根で集めて滝としたものもある。

ほかに動態水の効果として観魚施設が数多く設けられている。蘇州の滄浪亭の「観魚処」、承德避暑山荘の「石磯観魚」「知魚磯」。無錫の寄暢園の「知魚欄」、上海豫園の「魚樂榭」、杭州西湖の「花港観魚」などそれである。

4. 先ず水源を尋ねる〔先在尋源〕

庭園に活きた水が得られないと良い計画は樹てられない。昔から「一潭死水」は禁忌とされている。陳從周は「山には脈あって貴く、水は源があって貴い。脈理が貫通すれば全園が生き生きする《説園》。」とその水脈の存在を重視し、宋の郭熙もまた「水は天地の血なり。貴き血は周流し、停滞しない《林泉高致》。」強調している。清の潘耒は「園居で最も難しいのは水を得ることで、造園の難しさは患うことなく水が得られることである《縦棹園記》。」と水源獲得の難しさを嘆いている。

また流れは停滞させぬことが必要である。計成は「敷地を定めるには先ず水源を確かめ水口と出口を疎通させ、その流れ方を考慮すべきである《園冶》。」と説いているが、その水質浄化は容易でない。蘇州の諸庭園では河道が最近数多く埋め立てられ、停滞

水を生じて問題となっている。その対策に①池底に井戸を掘り移動する地下水と通じて補給する方法。②魚を飼って水中の微生物を捕食させ、腐敗を防止させる方法があるものの、質の豊栄養化が進み水性植物の過度な繁茂の原因になっている。

Ⅲ. 水景の施設

中国の自然景観は《中国地貌図集》によると、構造地貌・流水地貌・カルスト地貌・氷河地貌・風成地貌・黄土地貌・海岸地貌・人工地貌・山地と平原に分類されているが、庭園の水景景観として曹林娣は《中国園林芸術論》に池塘・湖泊・江河・山溪と谷澗・濠濮・瀑布・淵潭・天池・源泉としている。本文はこれを池・流れ・滝・庭橋・井泉と開門・噴水に分類してその特徴を明らかにする。

1. 池

(1) 庭園の規模による特徴

庭院や小庭園では岸边に山石や植栽を添え、水面の彩りに魚が飼育される。小院や寺院には整形池が用いられ、雨水だまりの「長方池」、孔廟に倣う書院の「泮池」、風水説に関係する「半月池」などがそれぞれある。小中庭園では家屋に接してやや細長い池を配し、橋を架けて水面を釣合よく分割し奥行き感を作り出す。中大庭園では地岸を假山・建築・植栽などにとって総合計画され、集合分散の原則が用いられる。蘇州の庭園群は立地条件から横長の長方形池が造られるので、橋や廊などで中近景を作り、長手の方向から奥行きある水景を觀賞している。大庭園では池塘や湖沼風が多く利用され、地勢にならい水面を景区に分割している。池塘には広々とした「集」と分

散して奥行きを見せる「分」とが用いられる。堤には整形式の石積み護岸が多く、水性植物と養魚などして山野の野趣を再現させる。湖沼の岸は自然なカーブを描き、堤で水面を大小に分割し、主景となる島や建築を配置する。また景点には州浜・湾・半島・島・橋などがあり、水源は溪澗や流れで隠して奥行感を与え、水位は高いと軽快な感じとなる。北京の頤和園昆明湖と万寿山仏香閣、北海公園の瓊華島と白塔がその例である。

(2) 築山と関係する山石池と池山

計成はその著《園冶》に「山石池」と「池山」を紹介している。前者は湖石護岸を水面に張り出して水際を見えなくなるように、また後者は池の中に假山を築いて水景と山景を組み合わせ水假山と称し、「池の上に山を築けば園内第一の景勝地となる。山に大小あれば更に妙景ができる。水面には沢飛び石〔歩石〕、山頂には反り橋を架け、山中に洞を潜め、或は石を穿ち水を渡るようにする。しかも峰巒が微かに遠く見え、雲招き月隠れる。このような処に仙人が住むのである《園冶》。」と解説している。南京の瞻園がこの好例である。

(3) 池岸と池面の配植

池岸植栽はその樹形と色彩によって体形の異なる臨水建築を引き立てる。一般にやや大きな落葉樹を主木として低い花木と常緑樹が添えられ、岸边の枝葉は框景を作る。池岸の高い場合は枝垂れ柳など、石面には薜荔などを植え、岸上には萱草・玉簪・胡蝶花・鳳仙花・白丁花・秋海棠などを配して色彩美を作り出す。水性植物の主なもの^{しゅうとんい}は蓮〔荷花〕で、宋の周敦頤による「汚れた泥土から清い花の咲くさまが、まるで汚

れた世の汚れ に染まらぬよう《愛蓮説》
という寓意によって大いに普及され、承德
避暑山荘の“曲水荷花”“遠近泉声”。蘇州
拙政園の清い香が満ちる「遠香堂」。獅子林
の「荷花庁」などがその例。

2. 流れ

(1) 山溪

谷川の流れと連山で形成された景象。中国は一般に雨量が少く谷川の水もまた少ない。庭園に天然の溪流が存在する例はまれである。水源は遠くに見せ、流れは屈曲させ、急流、緩流をまじえ、岸に小道、自然石で陰しく護岸する。水底には礫を敷き、水位は浅くして遊魚や水草の観賞に便利なよう造られる。例として北京頤和園の諧趣園にある「清琴峽」、蘇州拙政園西部の溪流、芸圃の南斎少院一帯の溪流がある。

(2) 潭と澗

「潭」は深い淵、「澗」は深い山峽の流れをいう。計成は「假山は水の存在あって妙景となる。もし高所から水が引けないなら澗壑を造るべきで、水無くとも深遠な感じを覚える《園冶》。」と解説している。ここでいう「壑」は空堀のこと。有名な無錫の寄暢園にある「八音澗」は、長さは約 20 m、幅 2-4m、落差約 1 m 崖高は 2-3m の小流が狭く広く、速く緩く、小滝もあり、様々な水音が反響して格別な趣を見せてくれる。蘇州留園の「聞木犀香軒」脇の溪澗、網師園の「槃澗」、滄浪亭の仮山西側の「流玉短潭」もその好例。

(3) 濠濮

水位が低く狭くて長い水面と山形を組合した景象。山に挟まれて水が満ちている。例に蘇州の耦園東部仮山の東側にある狭い懸崖間を流れる濠濮、高所に石橋が架けら

れている。

(4) 河流

流れは不規則な带状で、時として狭長形の池になる。河流は長短・直曲・広狭し、流れる方向を奥行き深いものにさせる。堤の多くは土岸で自然石を散置し、配植して野趣に富ませる。一部に假山・溪谷、亭榭、船付き場があり、橋を架け、船遊びが行われる。例に北京頤和園の後湖、揚州の瘦西湖、蘇州拙政園の東部の曲水、留園西部の小河などがある。

(5) 曲水

曲水の宴を行うため、水面近く平石を主にした自然石で護岸し曲流させる方法。「流觴渠」とも称されている。東晋の 353 年会稽の蘭亭で王羲之が催した曲水の宴が名高い。彼は「この地は俊嶺な崇山、竹や林が茂り、清い水が勢いよく流れ左右に映える。ここで流觴曲水を行った。岸に座り管弦の音こそ無いが一杯に一詠、心を開いて伸びやかに叙した《蘭亭序》。」とある。上流に出題する主人が座り、毎回酒盃が各自の前に流れると一句が要求され、出来ないと罰杯という宴である。やがて亭と組合した「流觴亭」が工夫され、宋代の官式造営法規である《造営方式》に紹介されている。これについて計成は「昔は曲水を石槽に彫って造り石の上に龍頭を飾り、その口から水を噴出しているが工費が高く凡俗である。なぜ自然の流れにしないのだろうか《園冶》。」と慨嘆している。

4. 滝〔瀑布〕

昔から園内の動水景観として重視されている。中国では庭園の立地が平地に多く、雨量が少ないため溪流の水量はあまり多くないので低いながら様々に工夫されている。

一般に雨水を屋根から導いて落水させる方法【図1】、または高所の水槽に雨水を溜め、必要に応じて落下させる方法がある。前者は蘇州の環秀山荘、後者は獅子林のものが有名である。

滝の造り方に就いて計成は「瀑布は峭壁山と同じ方法で造る。先ず高楼の軒から雨水が利用できるかを調べ、雨水を濶で牆の頂に至らしめて天溝（屋根の雨落ち溝）のようにし、壁山の頂に至らしめる。そこに突出た石口から水を噴出させ、溢れ落ちさせる《園冶》。」と指導している。清代の江民が楊州の「東園」に造った人工瀑布は「牆上に木製の水槽を置き、水槽の水門を開けると、水がほとぼしり滝となる。觀賞部屋から俯瞰すると太湖石の数多い裂け目に折曲しながら深い潭に落ちるのが見える《楊州画舫録》。」とある。

5. 庭橋

庭橋は水面の狭くなった所に架けられ、一般に数回屈曲させた切石製桁橋が多い。大水面にはアーチ橋が用いられる。橋高は小池ほど低く、水に這うようにすると魚影や水草の鑑賞に便利で更に水面を実際より広く見せる効果がある。欄干は鉄柵よりも細長い切石の縁石が環境に調和する。階段状の石橋は明代伝統様式で、水面の浅い自然式山石護岸には沢飛び石〔歩石〕が用いられている。

6. 泉・井戸と閘門

園内の泉は造形加工され動水美観賞の要所とされる。泉の底には必要あれば粗砂が敷かれる。天然泉周辺は昔から園地化され、特に斉南地方の趵突泉は清の乾隆帝により天下第一泉に指定されている。ほかに鎮江金山寺にも天下第一泉、無錫の恵山園は天

下第二泉、蘇州虎丘には天下第三泉があり、庭園では蘇州の環秀山荘の「飛雪泉」。網師園の「涵碧泉」などはいずれも天然泉水を整形式の小池に加工されたものである。

井戸は水温が冬暖かく夏冷たいので大事にされている。池底に水質浄化用の井戸を掘った例に蘇州の拙政園・留園・獅子林・西園・耦園・退思園などがある。

閘門は流量調節の水門で、蘇州獅子林の池水は複廊南側の暗渠で園外に通じ、北京頤和園の諧趣園には石橋と一体になった閘門がある【図2】。

7. 噴水

噴き上がる水と音響は庭園に生氣を与える。早くも漢の上林苑には「河水から汲上げた水を銅製の龍の吐水口から銅仙人が受け《漢書・典職》。」とあり、また唐の長安にある温泉宮華清池では「甕から出た温泉が2つの白石で作った蓮に注いだ《每賈氏談録》。」とあって共にサイホン現象を利用したものと思われる。本格的な噴水は1747年、清の乾隆帝が円明園に造った西洋楼の「諧奇趣」「海晏堂」「大法水」で、いずれも龍尾車(水車)という機械仕掛けである。

IV. 水面護岸施工法

(1) 土坡護岸

水位が安定し風波穏やかな所に用いられる。一般に雨水で崩壊し難いよう水面に向かって緩傾斜をつける。大規模水面に適し、堤上を植栽することで土坡を固め景觀上も有利である。中には水際崩壊を防ぐため低く石板を築いた北京の圓明園の例もある【図3】。蘇州拙政園中央部の土坡護岸は葦が生え、植物がよく繁茂して江南水郷の面影をよく見せている。明の文徵明が描いた

《拙政園図》では土護岸が多く描かれているが、現在では雨水の浸食が避けられないため石護岸が主流である。

(2) 石積み護岸：山石で風致的に石積される方法。崩壊防止に有利だが生硬な直線状と高積みに注意される。角状の黄石や凹凸で水面に変化の作りやすい湖石が多く使われる。水面が岸内に吸い込まれるよう石を張出させると広い水面を思わせることが出来る。

①山石護岸：用材は自然石でその種類は統一され、岸の高い所では峭壁式山石護岸、低い高い所では磯石式山積護岸となっている。小池の護岸高は25cmから1m前後が良いとされる。護岸構造には杭打ち基礎が必要で護岸石裏込めの磚幅は50cm前後、更にその裏込めとして〔灰土〕を用いる場合もある【図4】。杭基礎の上には切石〔条石〕または大きな塊石で押さえ、山石は常水位以下に築き、基礎が水面上に現れないよう注意する。江南の庭園群の多くは山石護岸、北京頤和園の知春亭・後湖・諧趣園などの一部にも或る。

また漏水防止法について計成は「薄い板状の山石を選んで少しでも隙間があると水は溜まらない。これには“等分平衡法”(力学上の平衡に留意する方法)を用いる。即ち石の周辺或は三辺を堅く締める。二辺だけだと池底の石板が壊れやすく、一辺だけを圧すると細い裂け目が生じて水を注ぐことが出来なくなる。〔灰〕(桐油と石灰を混ぜた油灰)で塗り固めても水の流失は止まらない《園冶》。」と圧着方法を説いている。北京北海公園の瓊華島山上にある2つの方池の池底と池壁にはセメント混入土〔灰土〕で固め上に切り石〔条石〕を築き、目地

は〔油灰〕を用いている。

②磯石護岸：断崖の水面近くに置かれる低い平地状の石岸。水位の安定しないときは、低い階段状の磯とする。蘇州にある環秀山荘の湖石假山山麓、網師園の彩霞池石磯は黄石が平積されている。沢飛び石〔汀石・歩石〕が水面の狭く浅い所を渡る橋の代用として尊重されている。その基礎は素土をつき固め、〔灰土〕で二歩打ち固め、上に比やや大きく平石を60cmの間隔で固定する。

③切石護岸：一般に堅質の花崗岩が使用される。建物や露台の水面に接する部分や船付き場に多く、形式が単調なので水面局部に用いられる場合が多い。杭州の《西湖志》によると、清の1724年白堤改修のとき砂を敷いて杭打して陥没を防ぎ〔釘杭貯土〕、石を敷いて切石護岸としたとある。また明清以来の宮苑の大池によく使われ、中でも北京頤和園の昆明湖東堤は広大な水面の風波を防ぐため、湖底から高さは1.7—2.0m、最高でも1m前後は水面上に出るよう計画されている。湖底がヘドロと流砂層の場合は〔梅花杭〕を用い、杭の頭を押さえる切石〔压石〕を敷く。築いた切石には目地モルタルを施し、鑄鉄製の銀錠を石の継ぎ目に埋め込み、大城磚で裏込めされ【図5】、凍結防止には更にセメント混合土〔灰土〕を裏込めする【図6】。圓明園の「方壺勝境」で発見された灰土は厚さ約1.5mもあり、土圧に強いばかりか、厳しい凍結防止に役立っている。江南地方の庭園では薄く施すか、使用しない場合もある。杭基材には柏や杉木が用いられ、杭の配列は〔七星杭〕が多く、基礎地盤や水面の深浅・積載加重によって変化する。

おわりに

中国の水景技法のうち、その基本的な考え方に目立った相違は無いものの、異なる風土条件によって施設内容に相違のあることが判明した。その主なものに州浜に代表される海景がある。このような施設は現存

する庭園にも文献記録にも見当たらないが2002年、長安にある唐代大明宮遺跡の太液池蓬莱島南岸に川原石敷きが発見されている。技術的記録の稀な中国庭園の技法がこうした発掘調査によって明らかにされることが大いに期待される。以上

〔図1〕 降雨利用の滝
(蘇州・環秀山荘)

〔図2〕 石橋一体の開門
(北京・頤和園の諧趣園)

〔図3〕 土坡護岸
(北京・円明園)

〔図4〕 山石護岸
(北京・頤和園)

〔図5〕 切石護岸-1
(北京・頤和園)

〔図6〕 切石護岸-2
(北京・頤和園)

出典：図版は中国科学院自然科学史編：《中国古代建築史》科学出版社 1990 から引用

参考文献 1) 陳植注釈：《園冶注釈》中国建築工業出版社 1984

2) 中国科学院自然科学史研究所主編：《中国古代建築史》科学出版社 1990

3) 張承安主編：《中国園林芸術辞典》湖北人民出版社 1994

4) 陳從周著：《説園》同済大学出版会 1986

5) 張家驥編著：《中国園林大辞典》山西教育出版社、1997

6) 曹林娣著：《中国園林芸術論》山西教育出版社 2001

7) 陳從周主編：《中国園林鑑賞辞典》華東師範大学出版社 2001

8) 章萊烈編著：《中国園林芸術通論》上海科学出版社 2004